

淀川の大改修
細長い太子橋の地形

豊里大橋が出来て、この”渡し”は廃止され、堤防の上に”平太(田)の渡し”の大きな石碑が建てられた。河川の付替えによって左岸にとり残された地区は橋寺、三番など元々民家のあった部分を除けば廃河川敷であったり、水田や低湿地であった。土地所有者たちの請願によって市電が開通したのは昭和六年十月、このため旧の村道を除いて整然とした区画整理が行われた住宅地となっているわけである。

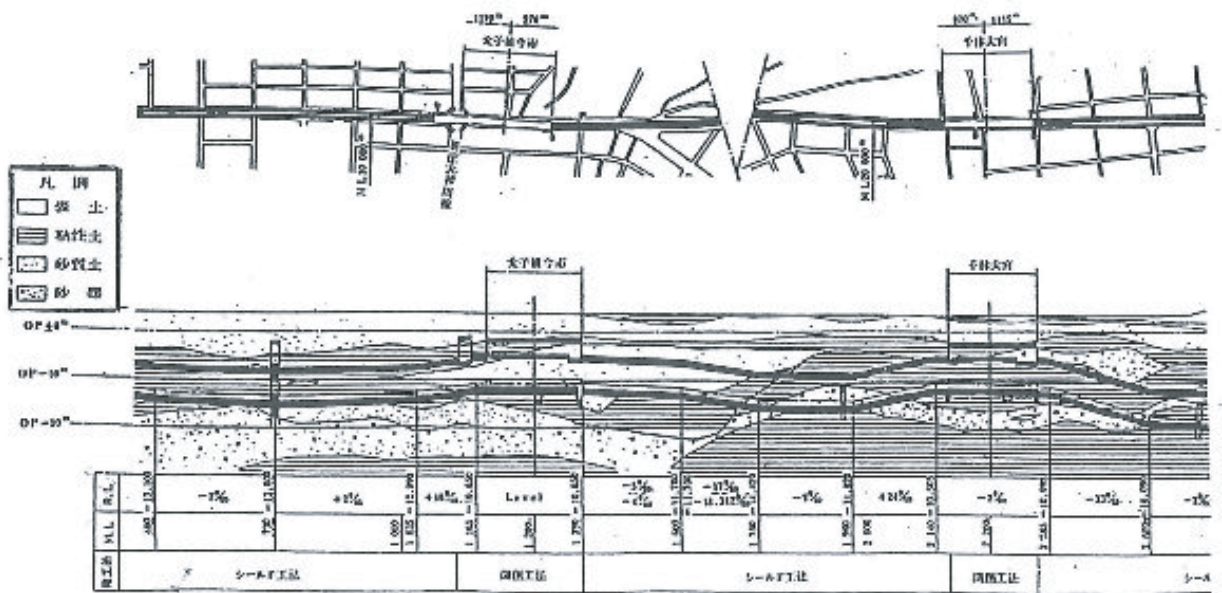
平太の渡し碑のあるあたりから斜めの小道が豊里大橋の下をくぐり古い屋並を残しながら続いている。犬の散歩には良いルートである。これが古地図の村道であることは間違いない。やがてこの小道も大きなマンション群の中で消えてしまう。

新河川と旧河道の分岐点あたりには”御野立所”(おのたちしょ)の碑、”五箇樋跡碑”が建てられ一寸とした公園になっている。

御野立ちされたのは後の大正天皇で明治四十三年十月四日皇太子として特別工兵の架橋演習を閲覧されたことが記してある。

五箇樋跡の碑は、水利組合管理者の手で昭和六年十月に建立されたとある。淀川の水を村々に供給する施設が偲ばれる。

このような成り立ちを持つ太子橋地区の地底を覗いて見よう。地下鉄工事の際に調査された地質縦断の太子橋今市駅付近のものが(図④)である。表土の下7~8mのところに粘土質の地層があり、旧河川敷であったことを表している。子どもの頃は台風が来襲すると堤防一杯の流水に避難命令が出たものである。今では治水工事のお陰で平安な生活が送れることに感謝しなければと思いつつ筆を置くことにしたい。 <草木>



■図④ 地下鉄土質図(資料:「大阪市地下鉄の建設(最近15年の歩み)1970▶1985から」)



太子橋の旧地層を撮る

堤防内側の 根堀現場に遭遇



■写真①

早朝散歩の途中、堤防工事現場(太子橋1丁目26番地先)で堤防内側(町宅側)の裾土留石壁の根堀をしている光景に遭遇した。

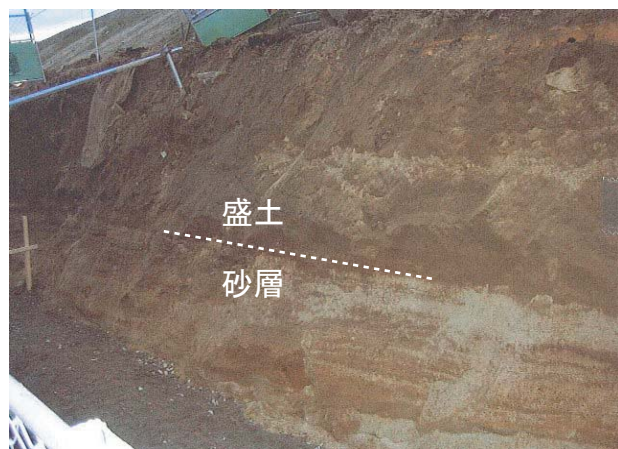
かねて、想像していたとおり、完全な砂層であった。

写真①は現場全体、写真②は根堀り場所、土の色は上部は黒く(盛土)、下部は白っぽく、旧地盤砂層である。写真③は新旧地層境界付近の接近写真である。

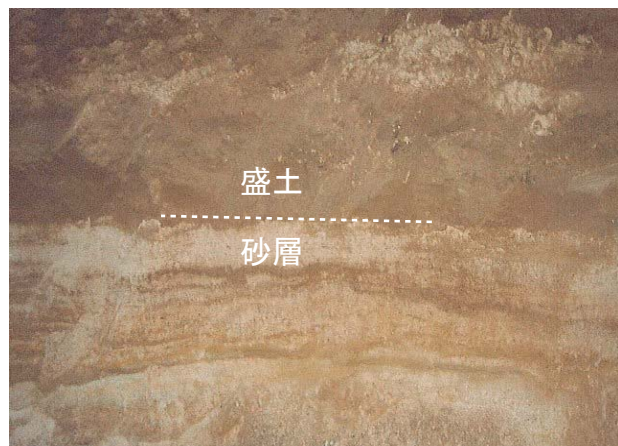
地下地層の全容は地下鉄谷町線の工事記録として交通局地下鉄誌の太子橋今市駅の地質縦断図がある。これによれば、表土の地下7~8mに粘性土があり、その上には砂性土で旧河川敷であったことを表している。

子どもの頃、台風(ジェーン台風など)など来襲すると堤防一杯の流水に退避命令が出て、飼っていた山羊とともに避難したものである。

今では治水工事のお陰で平安な生活が送れることに感謝したい。 <草木>



■写真②



■写真③